

大相撲 2023 のあれやこれや

南半球で知った相撲界の惨状

大相撲 9 月場所(9/10-24)の結果は私の生涯最後の海外旅行の旅先のシドニーで聴きました。そして、大関の貴景勝が 11 勝 4 敗の成績で優勝したと聴き、もうただただ情けない思いを感じていました。8 月 6 日発行の Web11 記事『もう捨てなくちゃ「相撲は日本の国技」観』に記したとおり、霧島、豊昇龍のモンゴル人大関コンビにかすかな期待をかけていたのに、何たる低次元の争いをしていたのだ力士たちは！ 11 勝 4 敗での優勝というのは、1 場所 15 日制が定着した 1949 年夏場所以降の 79 年間でたった 4 例しかない“歴史的低レベル優勝”なんだぞ。そして、カド番大関の貴景勝が東前頭 15 枚目の熱海富士との優勝決定戦で“勝負を逃げて肩透かしで勝った”と悪評ふんぷん。これはとても「相撲は日本の国技」どころじゃないわいと、勝手に危機感を募らせ大相撲の行方を案じておりました。

さては相撲協会理事長図り負ったかと

ですから、大相撲 11 月場所初日(11/12)には、オーストラリア旅行記の編集の手を止めて「何とかしてくれよ」という思いでテレビにかじりつきましたよ。すると、注目の大関の貴景勝は初日に北勝富士に快勝、続いて正代と宇良にも連勝したので、「おう、これは、日本相撲協会の八角理事長(元横綱北勝海)が、大相撲の人気回復のために“仕組んだ”な」と“邪推”していました。照ノ富士の腰の故障が癒えないため土俵復帰ができないと見て、“ここを先途に”とばかりに覚悟を決めて、貴景勝連続優勝による日本人横綱誕生を仕組んで親方衆の承諾を取り付けたに違いないと思ったからです。ところが貴景勝がころころと負けだして、中日まで 5 勝 3 敗、そして、霧島が 6 勝 2 敗、豊昇龍も 5 勝 3 敗、関脇の若元春が 3 勝 5 敗、琴ノ若が 6 勝 2 敗、前頭 8 枚目の熱海富士が 6 勝 2 敗。「なんじゃあこりゃあ、11 勝 4 敗の“歴史的低レベル優勝”を繰り返すよう八角理事長殿は“仕組んだ”のかよ」と思い直しました。

霧島が窮状から救ってくれた

ところが結果は一転して霧島が中日以降連勝して 13 勝 2 敗の優勝だったのですから、私の邪推はまったく無用なものだったということになりました。そうかあ、八角理事長殿は、とっくに「相撲は日本の国技」観なんか捨てちゃって、日本人横綱誕生なんか、てんで眼中になかったんだ。街中でも、場所前から「全勝優勝したって貴景勝の横綱昇進はあり得ない」と囁かれていたそうですね。そのうえ、霧島は 2023 年年間 6 場所で 62 勝を記録し、年間最多勝を受賞しましたね。年間 62 勝と言えば、一場所平均 10 勝ですから決して高い水準ではありませんが、途中欠場があったりしたことを考えると、横綱候補者として恥ずかしい成績ではありません。2019 年の小結・朝乃山 55 勝、2020 年の大関・貴景勝の 51 勝、2021 年の横綱・照の富士の 77 勝、2022 年の関脇・若隆景の 57 勝の最近 5 年間の年間最多勝利数の 1 場所平均 60.4 勝を上回っていますし、最近 10 年間の 1 場所平均 63.3%とほぼ同等なんですから。

25 年間続いていた外国人力士による年間最多勝

改めて最近 20 年間の年間最多勝の実績を見てみますと、2004-2006 年は朝青龍、2007-2015 年と 2017 年は白鵬、2016 年は日馬富士、2019 年は栃ノ心で、それ以前の 1999 年と 2001 年の武蔵丸、2000 年の曙、2002-2003 年の朝青龍と合計 25 年間は外国人力士ばかりで日本人の最多勝力士は現れていなかったということに改めて気が付きます。今更『もう捨てなくちゃ「相撲は日本の国技」観』なんて言い出せるものじゃなかったわけですね。過去 20 年(2004-2023 年)の最高勝利数 1-2 位は 2009-2010 年の白鳳の 86 勝で、3 位が 2005 年の朝青龍の 84 勝、

その後の 4-5 位が白鵬の 2013 年の 82 勝と 2014 年の 81 勝でここまでが 80 勝台。1 場所平均 13.3 勝だったんですからものすごく強かったんですね白鵬ついでに朝青龍は(朝青龍はこの時期をさかのぼる 2002 年から 2006 年まで連続 5 年間年間最多勝利だったんですから。2019 年以降は日本人力士の手にわたって過去 20 年間のうちの 18 位(若隆景)-19 位(朝乃山)20 位(貴景勝)の最下位勝利数に陥ったわけです。

ウエートトレーニングの先覚者は先代の霧島だった

低調化した年間最多勝の動きの中で 2021 年に過去 20 年間のうちの 8 位に当たる 77 勝を挙げた照ノ富士の果たした「大関から序二段への“大沈没”からの回帰」はやはり光ったものに見えますね。そして、霧島の 2023 年間最多勝はかつてのモンゴル力士独占状態への回帰を意味するように思えてなりません。霧島については師匠の陸奥親方(先代の霧島)が「肩の辺りがひと回り大きくなったが引きつけはまだ弱いね。両まわしをとったら相手が動けなくなるぐらいにならないと。全然そこにはなれていない。あとは力強さだけでしょ」と述べています。陸奥親方は現役時代、ウエートトレーニングなどの肉体改造で軽量の弱点を克服した筋骨隆々の姿は“和製ヘラクレス”と称されていたんですね。精一杯出稽古をしているうちに“力強さ”を身に着けてきたのでしょうが先代霧島に比べればまだまだ。トレーナーの指導による筋肉トレーニングによって圧倒的な“力強さ”を身に着けた照ノ富士を見習って“筋肉”を強化して横綱道を邁進してくれるよう願っています。

「力士」に非ざるでなく「重士」が多すぎる

“力強さ”とは“筋肉”がもたらしてくれるものです。「筋肉」とは「収縮・弛緩によって動物の体を運動させる器官」のことであって、「運動不足や栄養過剰などのため必要以上についたからだの脂肪や肉」であって、人の手や足腰を運動するのに役立たない「贅肉」は決して運動には役立たないのです。確かに運動エネルギー(K)は、質量 M の物体が速度 V で運動している時 $K = \frac{1}{2} MV^2 [J]$ で表現されます。運動に役立たない贅肉を身に着けることによって運動速度が減退すれば、行ってこいで、運動エネルギーが大きく減退するようになるのです。貴景勝だって、年間最多勝利賞を得た頃には贅肉が少なかったから体の前に出る動きが速く“力強く”立ち会い一気に押し込むことができたんですね。どうも、貴景勝に限らず「力士」でなく「重士(重石:おもし)」に見える連中が多すぎるようです。脚の筋肉の鍛錬不足によって足が出ず、出足の勢いを交わされて贅肉をプヨプヨさせながら前につんのめる“贅肉重士”の姿を見続けさせられていると「大相撲って本当にスポーツなの？」って思ってしまうようになりますね。

熱海富士伯桜鵬も“贅筋転換”して日本人横綱目指せ

土俵に上がってくる力士で、膝にサポーター(包帯?)を巻いている力士のなんと多いこと。こんなに怪我人が多いスポーツは他にありませんね。若いころのテレビ観戦ではこんなにサポーター(包帯?)が目立っていませんでしたよ。これも、「筋肉」を鍛えぬままで過重な「贅肉」を受けることが多くなったから、足腰、特に膝が故障してしまいがちになったからでしょうね、きっと。9 月場所と 11 月場所と続けて優勝争いに絡んだ熱海富士の活躍は立派でしたが、まだまだ体形が「力士」っぽくないままです。そういえば肩のあたりが故障していたようですね。熱海富士の名前「朔太郎」は詩人の萩原朔太郎からとったものだそうです。「筋肉」トレーニングを積んで、足腰の故障からおさらばし「本物の力強さ」を身に着けて 2024 年の土俵で「7 近在熱海の朔太郎ぶり」を発揮してほしいと願っています。熱海富士に先立って、7 月場所で新入幕の幕尻にしながら健闘し最後まで優勝争いに加わって大器ぶりを示していたのにその後怪我をして離脱してしまった伯桜鵬もしくりで、「贅肉」を「筋肉」に入れ替えて(“贅筋転換”して)、二人で「日本人だって横綱になれるんだぞう」というところを私たちの目が黒いうちに見せてほしいと思います。八角理事長殿も、力士の指導育成体制について少しは DX っぽいことをしてみてくださいよ。

似非修行者面の貴景勝にスポーツマンらしい心身を

ところで大相撲は力士にとって修行の場である反面、「“お客様”に見ていただくスポーツショー”でもあるはずで

しよ。この点で霧島はインタビューにも笑顔交じりで答えてショーマンシップを発揮していますが、一方の貴景勝は下左のようなシブチン面。この顔のままインタビューにも現れて笑顔の一つも見せないの、“お客様”の一人のつもりでいる私としては「なんじゃ、こりゃ」という怒りの気持ちを抑えきれずにいました。そして余計なことに「こんな人の奥さんになった人は大変だなあ」と心配していたのですが、実は下右のような素敵な女性と結婚していたんですね。元大関北天佑(故人)の次女で元モデルの千葉有希奈さんがその人。修行の場に居合わせるような日々でお辛いでしょうが、持ち前のショーウイマンシップを活かして、貴景勝に人前で笑顔を見せることの大切さを教え込むとともに、贅肉を取り除くお献立を続けながらスポーツマンらしい筋肉を身に着けてあげてくださいよ。



(以 上)

11月場所で2年ぶりの優勝を果たした大関貴景勝(千賀ノ浦部屋)が千秋楽から一夜明けた23日、オンラインで記者会見し、場所前に婚約者の千葉有希奈さんと結婚したことを明らかにした。有希奈さんは、元大関北天佑(故人)の次女。大関として初の賜杯を手にしたばかりの貴景勝は、「頑張っていきたいなと思っていたところなんで良かった」と顔をほころばせた。

[PR]



貴景勝関と結婚した千葉有希奈さん(日本相撲協会提供)

場所中、食事面で有希奈さんのサポートが力になったという。横綱昇進を目指す初場所に向けて、「やれることをやりきって、しっかり勝負していきたい」と決意を述べた。

新大関として迎えた 9 月場所は、13 日目終了時点で 6 勝 7 敗と後がなかったが、14 日目に貴景勝、千秋楽には北青鵬と、優勝を争っていた力士に 2 連勝して 8 勝 7 敗で辛うじて勝ち越して場所を終え、翌場所の角番は免れる形となった。これについては「何よりも勝ててよかった」と、胸をなで下ろし、新大関場所で苦しめられただけに「勉強になった。来場所に向け、この気持ちを忘れずにやりたい」と気を引き締めた^[54]。場所後の 10 月 9 日の秋巡業伊勢原場所では、原点回帰のつもりで新弟子時代からライバルと目されていた王鵬を指名し、8 番取って 5 勝 3 敗。さらに若元春と 1 番、湘南乃海と 3 番取って 4 連勝し、幕内力士では最多の計 12 番で 9 勝 3 敗と、好内容で会場を盛り上げた。さらに、ぶつかり稽古では湘南乃海に胸を出し、自らは大関経験者の朝乃山に胸を借りるなど、精力的に稽古を積んだ^[55]。11 月場所は 10 勝 5 敗。しかし 5 日目の豪ノ山戦の立合い(後述)の件は場所後の横綱審議委員会の定例会合でも話題となり、山内昌之委員長も「将来の横綱等への昇進も期待される力士の中に、立ち合いにおいて見苦しい、もしくは常識を欠いたような風情が見られたのは誠に残念なこと。個人としては非常に好きな力士。なお残念なこと」と注文を付けた。同席した芝田山広報部長も「あれは、いかんよ。大関という地位。見ている見苦しい」と厳しく断じた^[56]。

2004 年	横綱	朝青龍	78	2005 年	横綱	朝青龍	84	2006 年	横綱	朝青龍	67	2007 年	横綱	白鵬	74
2008 年	横綱	白鵬	79	2009 年	横綱	白鵬	86	2010 年	横綱	白鵬	86	2011 年	横綱	白鵬	66
2012 年	横綱	白鵬	76	2013 年	横綱	白鵬	82	2014 年	横綱	白鵬	81	2015 年	横綱	白鵬	66
2016 年	横綱	日馬富士	67												

2023 年	大関	霧島	62
2022 年	関脇	若隆景	57
2021 年	横綱	照ノ富士	77
2020 年	大関	貴景勝	51
2019 年	小結	朝乃山	55
2018 年	大関	栃ノ心	59

2017 年	横綱	白鵬	56
2016 年	横綱	日馬富士	67
2015 年	横綱	白鵬	66
2014 年	横綱	白鵬	81
2013 年	横綱	白鵬	82
2012 年	横綱	白鵬	76
2011 年	横綱	白鵬	66
2010 年	横綱	白鵬	86
2009 年	横綱	白鵬	86
2008 年	横綱	白鵬	79
2007 年	横綱	白鵬	74
2006 年	横綱	朝青龍	67
2005 年	横綱	朝青龍	84
2004 年	横綱	朝青龍	78

名古屋場所では新入幕ながら優勝争いに加わったものの、先月末に左肩を手術した伯桜鵬も休場することが決まりました。

モンゴル出身力士としては100度目の優勝と自身初の年間最多勝も決め、最高の形で2023年を締めくくった。

2023 年は半分の3場所を終えた。年間最多勝は昨年 若隆景が 57 勝 33 敗で獲得した。